

Suggested Answer

クローニングとは、細胞分裂によって生物を複製することである。複製される生物のある細胞核が、細胞核を除去された未受精卵へと移される。このことが成功すると、誕生する生物は、もとの生物と同じ遺伝子構造を持つことになる。もし我々が人間のクローンを作る技術を発達させたとしたら、我々はそれを利用すべきであろうか。

もしもクローニングによってただ一人の子孫を作ること考えるのなら、出てくる異議は一つだけで、それもいくぶん推論的なもののように思われる。クローン技術で生まれた子孫であるという特別な立場ゆえの、心理的な問題が出てくるであろう。しかし、もしこれらの問題が小さなものあるいは存在しないものであるなら、一人のクローン人間を作るとは異議の

ないことのように思われる。

人々がクローンの概念を不快に思うときというのは、たいてい、全く同じ作りをした人々の大群を作るとを想像しているのである。このことは、様々に異なる人々がいるということに対して我々が置いている価値からすると、魅力のないことである。一つの町が一種類の男性のクローンと一種類の女性のクローンだけで占められているような極端な場合であれば、実際的な問題が起こるであろう。(人々は自分が誰と結婚しているのかを判断するのに困るかもしれない)しかし実際的な欠点は重要なものではない。

我々は多様性が失われることによって生活の質が低下するであろうと感ずるのである。また、現在我々が有する多様性の度合いには、遺伝学上の利点がある。非常に多種多様な遺伝子給源があることにより、我々のうちの一部が、死に至るある新型の病気の蔓延のような生物学的災害を切り抜けられる可能性がより高くなる。

クローニングは我々の人間関係を変えてしまうと予想できるかもしれない。バーナード=ウィリアムズは(違う状況で)、一人の人間としてというよりむしろ一つのタイプの例として、誰かを愛するとはどのようなことなのかを論じている。彼は次のように述べている。

「これがどのようなものでしょうか、我々はかすかにわかる。それは、ある複製可能な媒体で作られた芸術作品を愛するようなものでしょう。人は、いわばそのタイプの出来ばえを比較し始める。そして、自分の愛する人の近くにいたいと思うことは、モーツァルトのある演奏を、並の演奏であっても、聞きたいと切に

思うことと似ているであろう」

この気掛かりな可能性についての人を引きつける考えは、決して実現されることはないかもしれない。二人の人間の関係が、共有する経験や、互いに対する反応の歴史に依存する度合いのためである。ひょっとすると、クローニングは我々が最初に考えるほど人間関係を変えることはないかもしれない。(一卵性双生児の兄弟姉妹がいる人を愛するとはどういう感じなのだろうかと思う)そして心を不安にさせるいかなる変化も、それを補う利点によってつりあいがとれるかもしれない。クローン集団のメンバーたちは、親密さと共感という特別な絆(きずな)を強めていくかもしれない。

クローニングがどれほど人間関係を変えるか、また結局いかなる変化が良い方や悪い方に向かうのかどうか推測するのは難しい。主な反対意見は、遺伝子給源を狭めてしまうこと、およびそれに伴う、不毛な画一性と関係がある。これらの反対意見はとても強いものなので、クローン人間集団のいかなる実質的な利用も、今は明らかでない、何らかの非常にさし迫った理由によってしか、正当化することはできないであろう。